

---

金属鉱山研究会あらため鉱山研究会

# ニューズレター No. 77

2009年9月1日

---

- 1 定例研究会の報告 事務局
- 2 第24回鉱山の映像を観る会のご案内 橋本康夫
- 3 鉱山研究会会員がおこなう海外旅行、調査旅行等の扱いについて  
村串仁三郎
- 4 台湾鉱山見学ツアー案内 村田 淳
- 5 東京炭鉱，武蔵野炭鉱見学会の計画のお知らせ  
村田弘一，長渡隆一
- 6 事務局からの連絡

金属鉱山研究会あらため鉱山研究会 連絡先

会長 村串仁三郎

〒270-0127 流山市富士見台2-5-16-13-401

電話・ファックス 0471-52-8952

メール・アドレス

事務所 国学院大学、若木タワー第913号、菅井益郎研究室

〒150-0011 渋谷区東4-10-28

# 1 定例研究会の報告

日時 9年7月4日 2時—5時

場所 法政大学80年館7階丸会議室

出席者 橋本、川俣、金丸、遠田、本田、竹村、村田（弘）、村串、竹橋、  
小野崎、長渡、杉本（久々に13名という大人数で研究会がおこなわれた。）

## 1部 研究報告

遠田義則 「選鉱について」

以下のレジメのような報告がおこなわれた。

今度の選鉱学習では選鉱とは何か、鉱石を砕くということは、どういう作業なのか、という選鉱の目的から始まって、選鉱の方法、時代の推移について述べる。

選鉱の方法では手選法および比重選鉱法のジグ、重液選鉱、テーブル選鉱について、また近代になってから開発進歩をとげた浮遊選鉱法（以下浮選と呼ぶ）について学習の重点をおく。ただ浮選法の理論を短時間で網羅することは到底できません。そこで無理のない範囲で学習を進める予定です。

さて浮選は鉱石を粉碎、磨鉱し、水、浮選剤を加えて攪拌し、発生した泡に有用鉱物を付着、浮遊させて、脈石鉱物と分離する方法ですが、浮選機の断面図を参考に上記の内容などに関して説明する。また、選鉱で行なわれる破碎、篩、粉碎、分級、浮選、濃縮、脱水による精鉱処理および廃滓処理までの選鉱一貫作業をまとめる必要がある。その他、銅、亜鉛の分離がむずかしい黒鉱の選鉱まで範囲とする。

重液選鉱では浮選処理鉱量を縮減する目的で戦後まもなく足尾銅山において初めて実施されましたが、当時の鉱業所資料を参考に説明する。

最後に神岡鉱山写真史による明治の西洋技術の導入、亜鉛浮選の成功、選鉱設備の大型化まで取り上げます。この選鉱の歴史解説の内容もわかりやすく選鉱学習の締め括りに最適です。

関係資料は下記の通りです。

鉱山読本選鉱編

ビジュアル版日本の技術100年（日本の鉱山技術）

足尾鉱業所資料

神岡鉱山写真史

以上の資料を活用して学習を進めますが、選鉱について質問や疑問点など当

然出てくる。例えば、貯鉱舎の役割、選鉱の流れ（工程）、精鉱の品位、実収率等があげられます。様々な視点から「皆さんと考え」、選鉱の見方を学びたいと思います。

報告のあと、実際の選鉱に詳しい、元釜石鉱山社長の小野崎さんや、足尾銅山で働いていた杉本さんから、具体的な話があり、大いに皆さんの勉強になりました。

また特別アトラクションとして、遠田義則氏による自作「足尾の四季のギター演奏がおこなわれ、参加者一同から絶賛をえた。

## 2部 会誌86号の合評会

本研究会で初めて、会誌の論文について、合評会をおこないました。

最初に、竹村論文「石炭産業の再編と暖房炭市場」について、村田弘一さんからコメントがありました。

コメント慣れしていなかったためでしょうか、もっぱら論文の中の問題点について質問という形になり、筆者の竹村さん逐一回答していました。

2番手は、寺島敏治論文「戦間期にける炭鉱社会の経営者群像」について、金丸哲也さんの以下のような詳細なコメントがありました。

会誌 86 号の寺島氏の「戦間期における炭鉱社会の経営者群像」は大正期において創業された北海道釧路地方の太平洋炭鉱と北海道炭鉱鉄道(株)（三菱買収後の雄別炭鉱）の創業経営者について取り上げている。

取り上げた人物は太平洋炭鉱については創業社長である木村久太郎と配下の人物、北海道炭鉱鉄道については常務取締役でありながら実質的な経営責任者であった芝義太郎と鉱区出資者で芝と共同経営者であった宗像政蔵と配下の人物にスポットを当てている。

木村組及び太平洋炭鉱、北海道炭鉱鉄道及び雄別炭鉱ともに創業当初についての研究事例は極めて少なく、木村久太郎については同氏の死後に野村博愛が著した『木村久太郎翁』が世に知られている唯一の文献であり、太平洋炭鉱(株)の各会社史においても創業社長・木村久太郎に関する記述は大部分が本書からの引用である。

芝義太郎についての文献は近年までまとまった形で存在しなかったが 2006 年木下博民氏により『芝義太郎－幸運を手綱にした男の物語』が刊行され芝の

詳細な事跡が明らかになっている。

両氏とも日本石炭鉱業史及び北海道地方史には欠くべからざる人物であると考えるが、資料が極めて少ないこと（雄別炭鉱は会社解散）もあり研究事例は少なかった。

数少ない研究事例としては本論を著した寺島氏らにより 1974 年に北海道釧路市によって刊行された釧路炭田の唯一の通史である『釧路叢書 14 巻 釧路炭田』で木村については前出の『木村久太郎翁』、芝及び宗像については 1966 年に刊行された『阿寒町史』からの引用が大部分である。

本論文では木村については一応の成功を収めた台湾での成功体験を引きずり、生涯「山師気質」が抜けず、最終的には資産、台湾以来の協力者である、顔一族、近江時五郎、太田恭平などの有為な人材も離散してしまうこと等、当時の辺地にありがちな山師的経営の限界が述べられている。

木村を当時半ば未開地であった釧路地方に出現した山師的経営者と見ることは正鵠を得た表現ではないだろうか。

木村が安田善次郎（旧安田財閥）より春採炭鉱を買収した大正初期には北見の鴻之舞金山なども池澤享他地元の山師によって発見されていることや美唄炭鉱（後の三菱美唄）における飯田延太郎など、大正～昭和初期の北海道はまだ山師の活躍出来る時代であったと考えられる。

北海道では金属鉱山も含めると戦前までは八田満次郎（日高の各クローム鉱山）、田中鉱山（轟銀山や国富鉱山）、佐野隆一・鉄興社（稲倉石鉱山）、小田良治（幌別鉱山）、他に硫黄鉱山（代表例は恵山硫黄の押野常松）などもあり純粋な山師及び山師に近い人間が鉱山を開発・経営していた。木村も上記の人物らに近いと考える。

21 世紀を迎えた今日も空知地方では大手石炭会社が掘り残した露頭炭を採掘している中小露頭炭採掘業者も同様のケースかもしれない＝空知地方の内陸産炭地火力発電所が存在する限りコスト的に海外炭にも対抗可能。

本論で述べられているもう一人の北海道炭鉱鉄道の芝義太郎や共同経営者である宗像政蔵については鉱業家というよりは商人であり、芝は北海道炭鉱鉄道株を三菱に売却後、手にした資金で東京機械製作所株を買収し 6 代社長に就任し巨万の富を得るなど、鉱業家といよりも商業家という面が本論では強調されている（事実、芝は雄別を三菱に売却後はヤマに手を出すことはなかった）。

芝については本論及び木下氏の著作に見られるように人間性は粘り強く、機を見るのに敏であり、また一面では冷酷・非情な人間性も持っていた（例としては勘当扱いに近い息子の轍一のことをあげている）。

本論でも言及出来なかったところとしては、雄別炭鉱について書かれている数々の書籍では「内田良平らが 10 鉱区、三井鉱山 2 鉱区、芝義太郎ら所有する 3 鉱区、これら 15 鉱区を合わせ北海道炭鉱鉄道となる」となっているが、九州を拠点とする玄洋社の一員であった内田良平が何故、北海道でも辺地の未開の鉱区を保有していたのかが本論でも解明されていない。

同じような例としては北炭が玄洋社・遠山満から買収した夕張南部のクルキ鉱区もある（後の真谷地炭鉱の大部分）。

今後、玄洋社等の明治時代の国士と北海道の石炭の関係について解明が進むことを期待したい。

本論については買収者（三井、三菱）ではなく被買収者（木村、芝）の視点から書かれており貴重ではないかと思われる。

他の産業もそうであるが、被買収者の歴史は買収者によって抹消されることが得てして多く、敗者の側は木村久太郎のように後年事跡を追跡することが困難になるケースが多い（例としては太平洋同様に三井に飲み込まれた松島炭鉱の古賀春一、宇部沖之山炭鉱（現宇部興産）に実質的に吸収された東見初炭鉱の藤本閑作など、金属鉱山では日本鉱業に買収された尾小屋鉱山の横山一族、笹ヶ谷鉱山の堀一族など）。

寺島氏への今後の希望としては木村の前に釧路炭田に出現し、日露戦争後の恐慌で破産、破産後にブラジルに渡った釧路の大山師と言われた男・山縣勇三郎の各鉱山・炭鉱事業の解明を期待したい。

山縣勇三郎については 1995 年前田康により『火焰樹の陰―風雲児・山縣勇三郎伝』近代文芸社が刊行されているが前田氏は鉱業史の研究家ではないので、山縣と石炭及び鉱山についての記述は極めて少ない。

付言すると従来出自がほとんど分からなかった山縣勇三郎の一生を世に出した前田氏の著作は大著であると言える。

3 番手は、本田正男論文「搗鉱機の木製のプーリー（日向鉱山）」についての川俣修寿さんのコメント。

足尾で合宿が行われた際、本田宅にお世話になった。その時に、本田さんの仕事の一部を見せて貰ったが、緻密でいい仕事をしていながら、仕事の全体像が見えず、研究目的が定かに伝わってこなかった。

本田さんによると、役宅と鉱夫住宅から出る遺物に明らかな差があるそうなので、それを具体的に明らかにするだけでも価値がある。また、本田さんの発

掘した西沢金山の遺物を見ると、当時の生産システムは明らかに家内制手工業だった。それだからこそ、薬ビンをはじめ多くの遺物に鉦山名が入っている。現在では、精密な金型で大量にプレス生産、押し出し生産されている製品のほとんどが、当時は手作りされていたと思われる。たぶん、A職人が作る内容量100ミリのビンとB職人が作るものとは微妙に異なると考えられる。

そこで、本田さんの仕事を例えば、「西沢金山の遺物から見る鉦山の生活」とか「発掘したビンから見える商品の生産と流通」等のテーマに沿ってまとめることを勧めたい。まとめるに当たって既存の研究領域、研究方法に左右されず本田さん独自の手法の開拓を期待したい。

近代史を、発掘考古学的手法で研究した例は日本には少ないので、本田さんの研究成果の発表が待たれる。

本田会員からは、データベースの構築構想が報告され、会員から協力したいと発言があった。

ようするに会報82号の本田「新沢金山とその時代―遺物から見た鉦山」以来、鉦山から遺物を丁寧に記録した論文だ

4番手は、川俣修寿論文「万代鉦の湧出と素と八ツ場ダム報告」について村串仁三郎さんのコメント。紙数の都合で割愛。

## 2 第24回鉦山の映像を観る会のご案内 橋本康夫

第24回の上映項目はバラバラの感がありますが、それぞれに見応えのある映像作品を選びました。また再上映の機会もなかなか設けられないのでこの機会にぜひご参加下さい。なお会員外の参加については後述します。

また、今回の上映会にて第1回から幹事を務めて参りました橋本が「健康上の理由」にて退く事になりました(協力は今後も続けます)。

この後の上映会について新たな幹事を選び上映会を続けるのか、それとも休止するのか等を当日の残り時間で参加者で話し合いたいと思います。幹事に立候補なさりたい方は当日ぜひご参加をお願いします(現在1人立候補者あり)。

■日・時 2009年9月26日(土)・13時00分(開場)・

13 時 20 分(上映開始)から 17 時 00 分まで  
参加無料・案内看板は「鉾山研究会」と表示しています。  
なお、上映終了後に研究会の事務局会議を行います。

■会場：渋谷勤労福祉会館・2F・第3洋室・

渋谷区神南 1-19-8・渋谷駅下車徒歩 7 分・公園通り・パルコ前・

電話 03-3462-2511 <http://www.city.shibuya.tokyo.jp/est/kinro.html>

(リンクしていませんのでコピーして下さい)

#### ■上映項目

●「1989 年北幌内炭鉾」・製作・著者 幌内歩こう会・撮影 斉藤靖則  
上映時間約 35 分・製作 2002 年

幌内炭鉾閉山前後を撮影した貴重な記録。立坑・繰込など坑内はもちろん、  
選炭機・斜坑・そして山神社祭りなど炭鉾にまつわる環境、施設等を音も含め  
て記録している。

●「旧鴻之舞金山酸性水湧水は止まず」・製作／著作 NHK 釧路・1991 年製  
作・45 分 道内ローカル「北海道スペシャル」竹村さんのビデオ提供

旧坑内廃水処理に従事する退職間近の鉾山職員と処理事業の詳細と問題点を  
ピックアップ。坑内の映像はもちろん、鹿児島県の菱刈鉾山の坑内映像もある  
貴重な作品。

●地球おどろきシリーズ第 2 巻「喜和田鉾山」未知の世界・青く光る灰重石  
鉾脈と鉾山採掘のしくみ・製作／著作 地球おどろき大自然 山本むつのり  
2008 年製作 46 分

山口県の喜和田鉾山は 1669 年に発見されたと伝えられる。当時は「二鹿鉾山」  
と呼ばれ、1671 年以降主に銅や鉛の小規模な採掘が行われていた。1909 年にそ  
れまで捨てられていた石(ズリ)の中から大量の灰重石が発見されタングス  
テンなどの一大産地として脚光を浴びた。しかし、喜和田には選鉾設備が無く、  
京都府の大谷鉾山に処理を委託していたが、この鉾山が 1982 年に閉山。近隣の  
玖珂鉾山に依頼したが、その後観光坑道化して選鉾を停止したため鉾山として  
の操業が困難となり、1992 年に操業を休止した。

このたび喜和田鉾山での坑内見学会を中心にして新たに喜和田鉾山をまとめ  
た映像が発売された。

採掘のしくみやローダーのしくみ、運搬等について映像や CG でわかりやすく  
解説している。

当日の上映時間割り(時間的には厳守の予定です)

13 時 00 分 開場  
13 時 20 分～14 時 05 分 「1989 年北幌内炭鉱」  
14 時 05 分～14 時 50 分 「旧鴻之舞金山酸性水湧水は止まず」  
14 時 50 分～15 時 05 分 休憩  
15 時 05 分～15 時 50 分 「喜和田鉱山」  
15 時 50 分～16 時 00 分 休憩  
16 時 00 分～17 時 00 分 「今後の上映会について」「上映項目の感想・次回上映項目」

研究会・事務局 から 17 時 00 分～ 解散・懇親会へ

※ 時間は突然の変更もありますので一応ご了承下さい。

※会員外の参加希望の方は下記のメールからお申し込み下さい(参加無料です)。

現在 7 名分の座席が確保できます。9 月 25 日まで受け付けますが、満員になりましたらその時点で受付は終了です。ご了承願います。

上記鉱山・炭鉱関連ビデオ等をお持ちの方で上映してもいいと思う方、また、ビデオのリスト等がある方、借用できるところを御存知の方、各種問い合わせは下記のメールにてご連絡をお願いします。なお、上映したビデオの貸し出し、ダビング等は固くお断り致します。

※ 各種問い合わせ等は下記のメールにてお願いします。

鉱山研究会(金属鉱山研究会改メ)・足尾研究会

橋本 康夫 (Yasuo Hashimoto)

E メール y-hasshii@hkg.odn.ne.jp

<http://www.jmrs.sakura.ne.jp/>

<http://www2.odn.ne.jp/ashio-kenkyukai/>

### 3 鉱山研究会会員がおこなう海外旅行、調査旅行等の扱いについて

鉱山研究会 会長村串仁三郎

〇 9 年 8 月 1 5 日

鉱山研究会は、会の力量が減退してきたため、研究会として鉱山鉱山跡についての巡検や地方研究大会を主催していくことができなくなりました。そこでそれぞれの問題に関心の強い会員が中心となって自主的にそれらの企画を実施

してきました。

それでもそうした企画と研究会の関係は必ずしも明確ではありませんでした。そこで今回、そうした企画と鉱山研究会の関係について、会長の私見という形式で、一定のルール案を提起したいと思います。

会員が中心となって自主的におこなう企画と鉱山研究会の関係については、以下のような関係であると指摘しておきます。

すなわち、それらの企画は、あくまで鉱山研究会の会員が個人的に企画されたもので、研究会として企画したものではない、ということです。したがって旅行に関連して発生する費用、事故などのトラブル等は、主催者と参加者の問題であり、鉱山研究会としては原則的に無関係であるということです。

## **4 台湾鉱山見学ツアー案内 村田 淳**

各位様

台湾ツアーの日程が決まりました。

林雅行監督に同行していただきます。従って、映画に登場する方々に案内していただける予定です。

詳細な日程や経費は追ってお知らせいたします。また旅行申込書がすでに届いていますので、すでに参加を希望しているかたは連絡をいただければお送りします。

＊なお村田からのメールが必要ない方やわずらわしい方はご面倒でも連絡をください。今後メールを送らないようにします。 村田淳

### **台湾鉱山見学ツアー案内**

映像の会に出てきている、林雅行監督が、九ふん、金爪石金山のドキュメンタリー

映画を制作、上映しました。

これを機に基隆、十ふん（炭砒）を含めた見学旅行を企画しました。

■旅行日：3泊4日・11月8日～11日

■経費：53,940円（予定）（航空、宿泊、食事、成田空港使用料、台湾現地空港税、燃料サーチャジを含む）。なお経費は、参加人数が多くなれば安くなる可能性があります。

■見学場所：金爪石、九ふん、十ふん、基隆の旧鉱山遺跡

■ 日程：（移動は主に専用車）

第 1 日 成田空港発台北空港着

宿泊：9 ふん

第 2 日 1 日中 金瓜石の鉱山遺跡（黄金博物館、水?洞エリア（十三階層、排煙道、六坑ほか）ほか見学 昼食は鉱山弁当を予定

宿泊：9 ふん

第 3 日 午前 9 ふん 鉱山遺跡（8 番坑、資料館、九番坑（坑内見学交渉中）ほか見学

午後 平溪線に乗車して、十ふんの炭硯遺跡見学

宿泊：基隆

第 4 日 午前 基隆市内見学

午後 台北空港発成田空港着

■ 参考文献：林雅行著『台湾 金鉱哀歌』クリエイティブ 2 1 2009 年 5 月 1500 円

映画『風を聴く～台湾・九ふん物語』と『雨が舞う～金瓜石残照』の 2 本の台本とそれらにまつわる様々なことを書かれています。旅行に参加するかたはぜひとも買い求めてお読みください。

■ 申込み・問い合わせ：村田淳 電話：045-401-5259 携帯：080-3496-6964  
メール：[sunao-murata@y8.dion.ne.jp](mailto:sunao-murata@y8.dion.ne.jp)

221-0011 横浜市神奈川区神之木台 41-22

（メールの閲覧は週に 1 回程度なのでできれば電話でお願いします。

2009 年 8 月 10 日記

## 5 東京炭鉱，武蔵野炭鉱見学会の計画のお知らせ

村田弘一，長渡隆一

現在，武蔵野炭鉱経営会社の日豊鉱業株式会社様に連絡を取っています最中ですが，本年 2009 年 12 月頃，武蔵野炭鉱（飯能市），東京炭鉱（青梅市）の見学を計画しております。

目下計画中ですが、約 10 名位の先着又は、抽選により、申し込みを受け付けます。尚、日豊鉱業株式会社が見学 NO の答えの場合は、定員以上の申し込み受け付けをおこない、並びに、構外からの見学と、東京炭鉱の見学のみになりま

す。

申し込み先は村田弘一 (MURATA Hirokazu, h.m.kozan.mania@docomo.ne.jp)  
又は長渡長渡隆一まで (NGTA201@t.vodafone.ne.jp)

## 6 事務局から連絡

### 海外鉱山文献読書会のご案内

海外の鉱山文献を原書で読む勉強会を毎月行っています。文献を通して、海外の鉱山史と鉱山事情を学ぶほか、外国語の専門用語に慣れることを目的としています。外国語が苦手という方こそ奮ってご参加ください。(文責丸山)

■テキスト Clark C. Spence 著『Mining Engineers and the American West: The Lace-Boot Brigade, 1849-1933』

次回の日時と場所につきましては、鉱山研究会ホームページをご覧ください。

### A・ホームページ運営委員長から

川俣修寿

①ホームページ開設から数ヶ月経ちましたが、「映像の会」と「英文を読む会」以外会員の利用がほとんど無いのは残念です。この間文献紹介は1冊も新規書き込みが無く、掲示板も利用されていません。このままでは、財政問題から来年度には閉鎖の検討も必要となります。

②当運営委員会では、ホームページに情報を掲載してくれる会員を求めています。現在、通常の「ニューズレター」は、山本さんがPDFで掲示してくれています。葉書連絡などは、担当者がおらず困っています。事務局は、引き受けられる人手がないので会員の協力をお待ちしています。

### B・名簿管理担当から

前回ニュースに同封して会員の住所、電話、メールアドレス、研究・関心領域のアンケートをお願いしましたが20人の会員からは返信がありませんでした。退会を含めてご回答をお待ちしています。

なお、名簿の作成・配布については現在事務局で検討中です。

### 会誌87号の原稿募集

12月末締め切りで会誌の原稿を募集します。かつてのように、会の財政は豊かではありませんので、投稿原稿は、最高10ページ程度に制限したいと思います。それを超える場合は実費をお願いすることにもなります。おそらく昨

年並みに会誌を発行するとなると、財政が破綻します。そこで来年度の会計は、会費の値上げをせまられるか、「友子」の会計方式のように、本年度の出費分を次年度の会費に積み上げて賄うという方法が考えられます。あるいは、投稿が少ない場合は、2年に1回の会誌発行ということになるかも知れません。これが今後の課題です。

ふるって皆様がたの投稿を期待しています。編集子

## 定例研究会での報告募集

研究会での報告者を募集しています。どなたか報告をお願いします。

## 新会員の紹介

中山喬央（なかやま たかひろ）氏

住所〒253-0085 神奈川県茅ヶ崎市矢畑419-139

電話・FAX 0467-83-0111

e-mail mw-taka@mw.biglobe.ne.jp

1934生まれで、退職後明治大学、早稲田大学大学院を修了し専攻は考古学です。興味・関心のあるテーマは日本列島での金属文化発生時期。日本考古学研究会、日本玉文化研究会会員。ちなみに高校で久保会員の先輩だそうです。

主な著作、「日本考古学の光と陰」彩流社、「歴史に魅せられて」05年収載、「考古学判る社会の動き」栄光出版社、「まんじ100号記念」06年収載など。